

## 5. 妻木山地区の分布調査報告

### —妻木晩田遺跡第8次分布調査—

#### 1. 調査の目的

分布調査は、妻木晩田遺跡の現況の詳細を踏査により確認し、発掘調査の及んでいない地区の現況等を把握するとともに、妻木晩田遺跡の全体像を知る手がかりとするものである。調査成果は将来の内容確認調査、重点調査をおこなう上で指針となるものであり妻木晩田遺跡の調査研究の基礎データである。

今年度は、妻木丘陵の妻木新山地区を踏査した(46P写真参照)。妻木新山地区は、東西にのびるやや幅広の尾根と、そこから北または北西方向に派生する短い尾根からなる。調査対象としたのは、丘陵の頂部縁辺と尾根の稜線である。これは、第一次発掘調査の範囲が及んでいない丘陵頂部縁辺の遺構状況を把握し、尾根上の墳墓を想定することを目指したためである。これまでの一次調査、および分布調査によると、マウンドや竪穴住居、段状遺構の痕跡が現地形の高まりや窪地として残存しているとされており、こうした地形を念頭に踏査をおこなった。

#### 2. 状況

踏査区域は全体的に枯れ松を伐採した際に発生した倒木が顕著であり、竪穴住居状のわずかな窪地など微細な地形の観察が困難な箇所が多く認められた。

以下、各踏査ルートに分けて調査結果を報告する。文中における①②などの丸番号は地図中の番号と一致し、ルート番号をさす。

①妻木新山2区西端部である。北西方向へ短くのびる尾根では、標高90m付近でテラス状に傾斜が緩慢になる部分を確認した。

丘陵の南側斜面では標高80～90m付近で等高線に沿い東西方向にのびる階段状の平坦面を確認した。幅2～3m前後の平坦面が4段程度確認され、最下段には斜面に沿って東西方向へのびる幅6～7m前後の平坦面がある。埋没が進捗していない現状からみて、比較的新しい掘削と思われる。かつてこの斜面部には果樹園があったとされており、植林に伴う作業道の可能性がある。

②妻木新山2区西端部から3区へ至る幅広の尾根の西側緩斜面部である。多量の倒木のため、地形の詳細が確認できたわけではないが、遺構の痕跡はみられなかった。

③妻木新山2区西側の北斜面部から3区北側へのびる尾根である。2区の北側斜面では標高105m付近で幅約5mの平坦地2カ所にそれぞれ径約4m、径約3mの

窪地がある。竪穴住居跡かもしれない。

3区北端部から北へ延びる稜線上では、標高65m～80m付近で、従来妻木山5号墳として登録されているものの南北に新たに2基のマウンド、および平坦面1カ所を確認した。いずれも直径6～7m程度の低いマウンドで、斜面上方側には尾根を横断する溝状の落ち込みをとまなう。妻木山5号墳、および下方の1基には、墳裾部分に幅1～2m程度のテラス状の地形が認められる。

このことから、尾根幅がやや広がる上方から中腹にかけて、稜線部を溝で切断しマウンドを構築するタイプの墳墓が連続的に存在すると考えられる。3区北端部には、古墳時代前期の方墳が確認されており、墳墓の構築時期を考えるうえで示唆的である。

さらに下った標高50～60m付近では、4箇所のテラス状の平坦面を確認した。このうち最も広いものは、尾根を鋭く掘削し、およそ8×10mの範囲にわたり平坦面を構築しているが、ほとんど埋没が認められない状況からみて新しい時期の造成と思われる。

④3区西側に派生する尾根である。標高85m付近に狭い平坦地がみられる。尾根筋の傾斜は緩やかであるが、全体的に尾根幅は3～4m程度と狭い。丘陵を切断する溝やマウンドは確認できなかった。

⑤3区西側に派生する尾根である。標高70～80m付近では、尾根幅が4～5m程度とやや広く、平坦地に近い傾斜となる。シダ植物が繁茂しており詳細な地形観察は困難であるが、稜線部を切断する溝やマウンドは確認できなかった。

⑥2区南側の丘陵縁辺部である。東側では、標高90～100m付近で階段状をなす平坦面を確認した。平坦面は2段確認したが、いずれも幅4～5m程度で、斜面に沿い東西方向に延びる。これらの平坦面は、2区西端や、2区東端付近でも確認していることから、丘陵南斜面全体に及ぶことが想定される。周辺はもと果樹等の植林地であるとされており、植林に伴う作業道の可能性がある。2区東端付近の丘陵縁辺部は、緩やかな平坦地である。僅かに窪む地点もあり、遺構があるかもしれない。

⑦2区北側の丘陵縁辺部である。2区東端から1N区へ至る緩やかな尾根は、シダ植物の繁茂のため、地形の詳細はわからない。妻木山12号墳の北西側で妻木山4号墳を確認した。直径約9mの円墳とみられる。







⑧ 1 S区南端から東側へのびる尾根である。丘陵頂部平坦面の南斜面では、幅3 m前後の平坦面が東西方向に延びており、道跡と思われる。この上方で幅4～5 m程度の平坦部が認められた。標高95 mおよび75 m付近は緩斜面となり尾根幅も広がる。標高90 m以下の北側斜面は急傾斜である。標高70 m以下は尾根幅も狭い。

⑨ 1 S区西側の丘陵平坦面である。妻木山3号墳南東側の丘陵頂部は広い平坦面をなす。丘陵頂部周辺はシダ植物等の繁茂により、地形の凹凸を判断することは困難である。北東側斜面はスギの植林地であり作業用に加工された階段状の地形が認められる。

妻木山2号墳北東側の丘陵頂部縁辺では2基のマウンドを確認した。北側の1基は直径約7 m、高さ約1 m、南側の1基は直径約5 m、高さ約50 cmのいずれも円墳と思われる。

⑩⑪ 1 N区西側の尾根である。1 N区周辺の妻木山15～18号墳のほか、尾根先端部には、前方後円墳とみられる妻木山7号墳がある。両者の間の尾根上では古墳2基を確認した。

南西側斜面部では標高80 m前後において数カ所の平坦部を確認した。このうち最も西側のものは約8×10 mである。北西方向へ延びる尾根上では遺構を示唆する地形は確認できなかった。

⑫ 1 N区南西側の谷を寺坂集落へのびる里道である。

明治32年測図の地図にも、長田集落方面へ抜ける道として表されている。現在の道の北側斜面2～4 m上方には道と平行する平坦面がのびており、道跡と考えられる。

### 5. まとめと課題

今回の踏査は、妻木新山地区の丘陵頂部縁辺と尾根筋を重点的に踏査した。結果をまとめると次のようになる。

- ・ 3区北側の尾根上には、稜線をカットし埋葬空間を作り出す墳墓が連続的に構築されていることが考えられる。一方、その他の派生する尾根上では墳墓の存在を示唆する地形は確認できなかった。
- ・ 1 N区西側の丘陵、2区東側の丘陵頂部縁辺、および2区と3区間の緩斜面では、テラス状の地形が確認されるなど、弥生時代から古墳時代の居住域が連続している可能性がある。
- ・ 丘陵頂部平坦面には1区周辺を中心に古墳が認められる。前方後円墳とみられる2基を除くと、いずれも直径5～10 m程度の円墳の可能性が高い。

今後、妻木新山地区の発掘調査により解決すべき課題は多いが、3区北側尾根の墳墓を確認する作業、妻木新山地区で最も遺構の密度が高い1 S区南端部丘陵平坦面の詳細、1 N区西側の丘陵、および2区東側の丘陵縁辺部周辺での居住域の広がり確認、さらには、丘陵上に点在する古墳の内容確認が当面の課題と考えられる。

(岡野雅則、河合章行)



←写真 北西方向から臨む妻木丘陵と晩田丘陵